

# 「坊っちゃん」は笑わない

— 英・仏訳と比較しながら —

宮 本 陽 子

## 一

岩波文庫『坊っちゃん』のカバーの折り返しを見ると、  
「漱石の作品中もつとも読まれている『坊っちゃん』。無鉄  
砲でやたら喧嘩早い坊っちゃんが赤シャツ・狸の一派を相  
手にくり広げる痛快な物語は何度読んでも胸がすく。が、  
痛快だとばかりも言っていられない。坊っちゃんや、要す  
るに敗退するのである」<sup>(一)</sup>と要約されている。キーワードは  
「痛快」と「敗退」の二つだ。たしかに、可愛げのない学  
生たちの授業評価を気にすることなく、彼らの正当な苦情  
にも耳を貸さず、山嵐と一緒に策略家の赤シャツに「天誅  
を加へ」(十一、398)、「大嫌」(六、304)<sup>(二)</sup>な「野だ  
の面へ」玉子を「擲き付け」(十一、397)、「不浄の地を  
離れ」るのは「いゝ心持ち」(十一、398)のはずだ。  
しかし、坊っちゃんが「辞表を出したつて、赤シャツは困

らない」(十一、386)。いっぽう、「来てから一月立つか  
立たないのに辞表したと云ふと」、「将来の履歴に関係する」  
(十一、390)ため、東京に戻った坊っちゃんは二十五円  
の月給で「街鉄の技手」(十一、400)になるしかない  
のであるから、「痛快」と「敗退」は切り離せない。

「坊っちゃん」に痛快なものとすれば、勝つことを  
度外視した負け組の潔さと、「野だの世話になる位なあ首を  
縊つて死んぢまはあ」(五、301)とか、「こんな奴は沢  
庵石をつけて海の底へ沈めちまふ方が日本の為だ」(六、3  
04)、といったような多くは行動されることがないばかり  
か発話すらされない語り手・主人公の内心の声が語る科白  
の面白さである。勝ち組は誰かと言えば、マドンナとの婚  
約を破約にさせるためにうらなりを延岡に追いやり、これ  
を非難する山嵐と彼に同調する主人公を学校から追放した  
教頭の赤シャツと子分の絵画教師野だいこ、傀儡の校長狸

である。

赤シャツは学校でただ一人の「文学士」であり、「四国辺の」(一、258) 松山らしき地方都市<sup>三</sup>にあって、『帝国文学』の愛読者で「誰を捕まへても片仮名の唐人の名を並べたがる」(五、297) 人物である。「立派な玄関を構へ」た「九円五十銭」の家賃の家に住み、山嵐と坊っちゃん「天誅を加へ」ると、「理非を弁じないで腕力に訴へるのは無法だ」(十一、398) と言つて彼らの暴力に反対を唱へ、うらなりと婚約していたマドンナについては「約束のあるものを横取り」せず、「破約になれば貰ふ」(七、329) と法を重んじるふりをし、「中学教師は社会の上流に位するものだからして、単に物質的の快樂ばかり」を求めず、「釣に行くとか、文学書を読むとか、又は新体詩や俳句を作るとか、何でも高尚な精神的娛樂を求め」(六、321) るべきだと職員室で演説する赤シャツは、学問による立身出世を果した社会的勝ち組でもある。対する坊っちゃんは「語学とか文学とか云ふものは真平御免」、「新体詩など、来ては二十行あるうちで一行も分らない」(一、258) ことをむしろ誇り、知っている本と言へば、自身にはまったく縁のない立身出世がテーマの「フランクリンの自伝だとかプツシング、ツー、ゼ、フロント」(五、297) ばかりである。

りである。

坊っちゃん是要するに、うらなりを追い出すことに反対する山嵐を解雇したあとの「間のくさび」(十一、389) として学校に迎えられたに過ぎない。赤シャツ陣営は、坊っちゃんが「東京へ帰るとき丸めて海の中へ抛り込んで仕舞つた」(二、264) 辞令のように、彼を抛り出しただけである。赤シャツは「立派な玄関を構へ」た家になめてたくマドンナを迎えながら、小鈴との関係を続けるだろう。彼らの安泰と繁栄は揺るがない。

どこから見ても負け組の坊っちゃんだからこそ、周囲の人物をあだ名で呼ぶことによって彼独自の極めて独善的な言語世界に位置づけ、そのなかで彼が勝ち組をやつつけるのをわたしたちは面白く読む。わたしたち読者が楽しむのは、勝ち組に加えられる(多くは発話されない) 罵詈雑言だけではない。語り手が無防備に見せる不機嫌さ、不当さ、非常識さ<sup>四</sup>をも驚きとともに味わうのだ。

以上のような観点から、すでに多くの外国語に翻訳されているこの作品がフランス語訳と英語訳でどのように訳されているかを参照しながら、解説してゆきたい。なお、フランス語訳としてはエレン・モリタ訳<sup>五</sup>を、英語訳としてはアラン・ターニー訳<sup>六</sup>を使用する。

翻訳テキストの具体的な問題点については、次章からの分析とともに見てゆくが、ここではテキスト全体に関わる問題点を指摘するに止めたい。

作品が主人公による一人称の独白という形態をとっているために、間接話法の使用が非常に多い。直接話法が使われるのは、宿直の夜、布団にバツタを入れた学生たちと主人公の会話（四、284）、釣り船の上で赤シャツと野だいが主人公を騙すために交わす思わせぶりな会話（五、299）、主人公と下宿屋を営む貧乏士族の妻との「うらなり君」と「赤シャツ」についての会話（七、325—330）（八、345—348）、「増給」をめぐる主人公と赤シャツの押し問答（八、349—353）主人公が疎遠になつていた山嵐と仲直りをし、「二人の間にこんな問答が起つた」と明記されて開始される二人の会話（九、354—355）、この二人が赤シャツらの陰謀に憤る会話（十、373—375）、（十一、388—389）、二人が赤シャツの動向を見張る会話（十一、392—395）、二人に見張られているの知らない赤シャツと野だいの会話（十一、394）、二人が赤シャツと野だいに「天誅」（十一、394）

を下す場面の四人のやり取り（十一、396—398）、職員室での教師たちの演説等に限られている。つまり、発話者の姿を場面の前面に出したい場合、人物の発話内容が一人称体語り手の理解を超えている場合に限られていると言つてよい。

これは要するに、多くの発話が主人公の語りによつて包括されていることである。自分の内心の思いを発話することは極めて少ない語り手であるが、例えばじつさいに発話されたのか内心の思いかが明確でない樋口一葉の「十三夜」の語りとは異なり、「坊っちゃん」の語り手が直接話法を用いないということは、発話者の声で勝手に語らせたくないということである。以下は赤シャツが主人公を釣に誘う場面である。

君釣りにゆきませんかと赤シャツがおれに聞いた。  
赤シャツは気味の悪い様に優しい声を出す男である。  
丸で男だか女だか分りやしない。男なら男らしい声を出すもんだ。ことに大学卒業生ぢやないか。物理学校でさへおれ位な声が出るのに、文学士がこれぢや見つともない。（五、292）

「釣に行きませんか」と赤シャツがおれにきいた。

この男の声は気味が悪くなるほど甘ったるい。声を聞いた男だか女だか分らない。男なら男らしい声を出すもんだ。大学卒業者ならなおのことだ。おれなんか物理学校しか出ていないけれど、明らかにもつと男らしい声が出る。せつかくの文学士がこれじゃみつともないじゃないか。(仏・五、69)

情報内容として、赤シャツから釣に誘われた主人公が彼の女のような声を批判している、とまとめてしまうなら大きな違いはない。英語訳もフランス語訳とほぼ同様である。

しかし、赤シャツの「気味の悪い様に優しい声」が主人公の「男らしい」声に包まれている原文と、「釣にゆきませんか」という「気味が悪くなるほど甘ったるい声」が直接、聞こえてくるフランス語訳は同一とは言いがたい。原文において、赤シャツの「男だか女だか分りやしない」声は、この声に対する主人公の批判のなかに包まれている。批判の例証に過ぎないと言ってもよい。ここにおいて、赤シャツは主人公と対等に対峙する人物にはなり得ない。

「坊っちゃん」の世界はじつに様々な音、あるいは音の比喩で満たされている。山城屋の勘太郎は「自分の領分へ真

逆様に落ちて、ぐうと云」(一、250) い、清は井戸端で汚れた蝦蟇口を「ざあく音」(一、254)を立てて洗う。

「ふうと云つて汽船がとま」(二、261) り、主人公を乗せた車は「敷石の上を(…)がらくと」「無暗に仰山な音」(二、264)をたて、「教員が控所へ揃ふには一時間目の喇叭が鳴らなくてはなら」(二、264) い。「初めて教場へ這入つた主人公は、「先生と大きな声をされると、腹の減つた時に丸の内で午砲を聞いた様な気がする」(三、271)。学生たちは「おくれんかな、もし」という「生温るい言葉」(三、271)を使い、主人公の当直の夜には「二階が落つこちる程どん、どん、どん、と拍子を取つて床板を踏みならす音」を立て、「足音に比例した大きな関の声」(四、287)をあげる。赤シャツは「顎を前の方へ突き出してホ、、と笑」(五、292) い、「部屋の中を往來するのでも、音と立てない様に靴の底をそつと落す」(六、309)。清が書いた「分りにくい手紙」の「半切れ」は「初秋の風」に吹かれて「さらりくと鳴」り(七、331)、うらなり君の送別会ではみんなが「あちらでもチュー、こちらでもチュー、と云ふ音」と立てて「汁を飲」む(九、362)。芸者が唄い、「漢学の御爺さんが齒のない口を歪めて」(九、366) 歌い、山嵐も「乱暴な声」を上げ、「真

中へ出て独りで隠し芸を演じ」、野だいこも「越中禪一つになつて」歌つて踊る（九、367）。祝勝会では生徒たちが「勝手な軍歌をうたつたり、軍歌をやめるとワーと訳もないのに関の声を揚げたり」（十、368）する。主人公が「やつと云ひながら、野だの面へ擲き付けた玉子」は「くちやりと割れて鼻のさきから黄身がだら／＼流れだ」す（十一、397）。

こうした事物、人物が立てる音と、多くは発話されることのない罵詈雑言のために主人公が用意している言葉、「ハイカラ野郎の、ベテン師の、イカサマ師の、猫被りの、香具師の、モ、ンガーの、岡っ引きの、わん／＼鳴けば犬も同然な奴」（九、363）というような山嵐を驚かす豊饒な語彙が混ざりあつて聞こえてくるのが、「坊っちゃん」の世界の音である。人物たちの発話も間接話法で主人公の語りのなかに包括されることで、こうした世界の音の一つとなる。

さらにまた、他の人物たちの声が主人公の声に統合されるということとは、この非常識で不機嫌な語り手の主観を通してしか、人も事物も語られないということ、「坊っちゃん」の世界が独断と偏見の強い語り手の主観に支配された世界であるということに他ならない。船頭が「真っ裸に赤

ふんどしをしめてゐる」ような場所は「野蛮な所」（二、261）であり、「日向の延岡」は「猿と人とが半々に住んでいる様な」（八、345）土地であり、「女と云ふものは細かいもの」（七、352）なのだ。他人をあだ名で語る主人公は、世界の中心にあつて理不尽な主観で世界を統合する語り手でもあるということである。職位が高く、学問による立身出世を成し遂げた赤シャツと言えども、語り手の声を逃れて自由気儘に発話することはできない。

これに対して、直接話法で発話させることで赤シャツを主人公と対等に対峙する人物として登場させてしまったフランス語訳と英語訳は、部分的にはあるが、主人公以外の人物を物語内で客観的に独立した人物に昇格させてしまったことになる。

### 三

初めて社会に出た主人公は語り手が周囲の教師たちにあだ名をつけるのは、自らの主観が支配する世界を仮設するため、社会的な人間関係を無視するためである。ここにおいて、あだ名は単なる愛称ではなく随意な命名である。命名とは言語による一つの支配体系の構築であり、あだ名をつけることで彼は人々が置かれている社会関係を無視しよ

うとするのだ。

彼は清への唯一の手紙に書く、

きのふ着いた。つまらん所だ。(…)今日学校へ行つて  
みんなにあだなをつけてやつた。校長は狸、教頭は赤  
しやつ、英語の教師はうらなり、数学は山嵐、画学は  
野だいこ。今に色々な事をかいてやる。左様なら(二、  
269 傍線強調は論者)

「つまらん所」にあつて命名という手柄話を書いた彼は  
「いゝ心持ちにな」(二、269)るが、この手紙は清を大  
いに心配させ、「ほかの人に無暗に渾名なんかつけるのは人  
に恨まれるものになるから、矢鱈に使つちやいけない、も  
しついたら、清丈に手紙で知らせろ」(七、331 傍線強  
調は論者)、という返事を書かせる。清は「教育のない婆さ  
ん」(二、254)ではあつたが、彼女の心配は必ずしも場  
違いなものではない。彼女はあだ名に不穏意味を読み  
取つたに違いない。

じつさい、彼の不満と不逞な意思は膨らんでゆく。「学校  
には宿直があつて、職員が代る／＼之をつとめる。但し狸  
と赤シャツは例外である」ということに、主人公は憤慨す

る。山嵐は彼ら二人が「奏人待遇」であり「強者の権利」  
なのだから仕方がない、と主人公を説得するが、「強者の権  
利と宿直は別問題だ。狸や赤シャツが強者だなんて、誰が  
承知するか」(四、280)と納得しない。強者の権利に納  
得しないことがこのあだ名をつけることの根本的意味であ  
る。

彼がじつさいに当人に対してあだ名で呼びかけることは  
ないが、「うらなり君」が紹介してくれた「貧乏土族」(七、  
332)の下宿屋の老妻とは「うらなり君」以外の人物を  
あだ名で呼びながら話している。「もとが土族だけに(…)」  
上品」なこの家の「御婆さんは時々部屋は来て色々な話を  
する」(七、324—325)が、彼女は「強者の権利」  
を尊重する常識人である。このときの主人公は、赤シャツ  
がマドンナを奪うためにうらなり君を転動させること、そ  
れに対して山嵐が抗議に行ったことは知っているものの、  
宿直の事件に関しては赤シャツに騙されていて、山嵐が学  
生を扇動したのだと思ひ込まれている。だから「おれの  
様な単純なものには白とか黒とか片づけて貰はないと、ど  
つちへ味方をしていゝ、か分らない」(七、329)ので、  
この「御婆さん」に相談するのだ。

「赤シャツと山嵐たあ、どちらがいゝ人ですかね」

「山嵐て何ぞなもし」

「山嵐と云ふのは堀田の事ですよ」

「そりや強い事は堀田さんの方が強さうぢやけれど、然し赤シャツさんは學士ぢやけれ、働らきはある方ぞな、もし。夫から優しい事も赤シャツさんの方が優しいが、生徒の評判は堀田さんの方がえゝといふぞなもし」

「つまり何方がいゝんですか」

「つまり月給の多い方が豪いのぢやらうがなもし」

(七、329—33 傍線強調は論者)

彼女は士族であつてもヤセ我慢をせずに、經濟論理を優先させる。赤シャツが主人公に増給を提案した時も、これを拒否しようとする彼を、この論理で宥めようとして失敗する。彼女は言う。

「卑怯でもあんた、月給を上げておくれたら、大人しく頂いて置く方が得ぞなもし。若いうちはよく腹の立つものぢやが、年をとつてから考へると、も少しの我慢ぢやあつたのに惜しい事をした。腹立てたためにこ

ないな損をしたと悔むのが当り前ぢやけれ、お婆の言ふ事をきいて、赤シャツさんが月給をあげてやると御言ひたら、難有うと受けて御置なさいや」

「年寄の癖に余計な世話焼かなくてつてもいゝ。おれの月給は上がらうと下がらうとおれの月給だ」(八、

348 傍線強調は論者)

うらなり君の母親らしき女性を見たときには、「年寄を見ると何だかなつかしい心持ちがする。大方清がすきだから、其魂が方々の御婆さんに移るんだらう」(七、323)と考えていた主人公であるが、「若い」ためか、經濟論理に則つて忠告をする「御婆さん」に「腹を立」ててしまったのだ。

このように經濟論理、「強者の権利」を踏みにじる主人公は、山嵐、野だいこ、うらなり君に關しては最後まで使用される。例外的校長と教頭は本名が明かされないで、あだ名で呼ばない場合は職位で呼ばれることになるが、語り手はあだ名と職位の使用を厳密に区別している。宿直の夕方、温泉に出かけた帰り道、主人公は校長に会う。



訳はないとあるき出すと、向ふから狸が来た。狸は是から此汽車で温泉へ向かう云ふ計画なんだらう。(…)  
すると狸はあなたは今日は宿直ではなかつたですかねえと真面目くさつて聞いた。(…)  
二時間前おれに向つて今夜は始めての宿直ですね。御苦勞さま。と礼を云つたぢやないか。校長なんかになると、いやに曲りくねつた言葉を使ふもんだ。これは腹が立つたから、え、宿直です、宿直ですから、是から帰つて泊る事は慥に泊りますと云ひ捨て、あるき出した。(四、282  
傍線強調は論者)

同じ部分においては仏訳も英訳も同様な使い分けをしているが、このように職位の使用は社会的人間関係の復活をかりそめに許さなければ語れない場合に限られている。

ところが、英訳は彼がせっかくつけたあだ名を時として使用せず、山嵐<sup>(11)</sup> (the Porcupine) を「堀田」と呼び、野だこ<sup>(12)</sup> (the Clown) を「吉川」と何度も呼んでしまう。この二名の職階は主人公とそれほど変わらないので、堀田、吉川という名称が「強者の権利」と深刻に関わることはない。しかし、狸がほとんど「校長」と呼ばれている職員室内においてさえ、あだ名で呼ばれている赤シャツに関してはこ

の使い分けは重要である。

主人公が赤シャツに誘われて釣に出かけると野だいこも一緒であつた。赤シャツが大きな魚を逃してしまつたのを見て、彼は「いゝ気味だ」と思うが、野だいこは「教頭、残念なことをしましたね。今のは慥かに大ものに違なかつたんですが、どうも教頭の御手際でさへ逃げられちゃ、今日は油断が出来ませんよ」(五、296 傍線強調は論者)、いつものように追従を言う。以下は野だいこの追従に対する主人公の怒りである。

よつぽど撲りつけてやらうかと思つた。おれだつて人間だ、教頭ひとりで借り切つた海ぢやあるまいし。広い所だ。鯉の一匹位義理にだつて、かゝつて呉れるだらうと、(…)  
いゝ、加減に指の先であやつつてゐた。

(五、296 傍線強調は論者)

フランス語訳(仏・五、75)は原文とほぼ同様であるが、英語訳は前の部分で野だいこが教頭に呼びかける際に「先生(my dear sir)」(英・五、78)という丁寧な表現を使っているものの、後半部の主人公「語り手の内心の独白においてあだ名を復活させてしまう。



野だいこがべちやくちや言うのを聞いていると、いつにもまして思い切りひつばたいてやりたい気になった。おれだつて人間だ、赤シャツ一人で海全体を借り切ったわけじゃあるまいし、鰹の一匹ぐらいかかってくれて当然だと思った。(英・五、78 傍線強調は論者)

学校での権限が海の上では通用しないことを強調するため職位の使用であるから、ここであだ名を復活させると「海を借り切る」という表現が色あせてしまう。

あだ名の使用は単にコミカルな効果を狙ったものではない。あだ名をつけることによって、あだ名で呼ばないこともまた一つの意味を持つ。主人公「語り手の言語世界において「職位」は社会的な地位の呼称に止まらず、その地位に対する批判的意味を帯びる。したがって、主人公「語り手のあだ名の使い分けは一つの重要な言語上の力の行使となる。この使い分けを無視することは、言語世界の支配者としての主人公「語り手の力を奪うことに他ならない。「語学とか文学とか云ふものは真平御免だ」という主人公「語り手であるが、言葉に対する厳格さにおいては他の誰よりも秀でている。

#### 四

松山に行つてから「言葉を文字通りの意味に受けとめる筋違い」を旅館の下女たちや学生や同僚から何度も笑われる主人公「語り手であるが、幼少時代より彼は一種の不機嫌さとともに、言葉に対する異様な態度を見せていた。

「同級生の一人」に「飛び降りる事は出来まい」と言われたのが口惜しくて二階から飛び降りたり、新しい「西洋製のナイフ」を見せた友達にその切れ味を疑われ、「君の指を切つて見ろと注文」されたから「右の手の親指の甲をはすに切り込んだ」(一、249) りすることは、「真っ直でよい御気性」(一、253) の証拠ではない。むしろ、「今だに親指は手に付いて居る。然し創痕は死ぬ迄消えぬ」(一、249 傍線強調は論者) という結びに、語り手の不条理な怒り、不機嫌さが感じられる。彼としては自分の思ったとおり、と言うよりも、相手に言われたとおりを「真っ直」に行動しているつもりであろう。しかし、言われたとおり「文字通りの」行動こそが、彼の不機嫌な非常識さを表しているのだ。言葉で挑発した相手は、自らの言葉どおりに彼が行動するとは思っていなかったであろう。実行されるはずがないと高を括つて発話された言葉を罰するために、

彼は発話者の目の前でそれを実行するかの如くである。内心においてはのみ「痛快」このうえない科白を吐く語り手は、投げつけられた言葉を「文字通りの」行為によって投げ返す。これを主人公語り手は「親譲りの無鉄砲」(一、249)が原因の「いたづら」(一、250)と呼ぶ。

そのため、「いたづら」は多くの場合、自他の痛みを伴うものとなる。「母が病気で死ぬ二三日前台所で宙返りをしてへつつい角で肋骨を撲つて大に痛かつた」ばかりか、「大層怒つ」た母は「御前の様なもの、の顔は見たくない」と言い放つ。この言葉をそのまま主人公が「真っ直」に実行して「親類へ泊りに行つて居」る間に母は死んでしまう。

母と主人公の間のこの不機嫌の応酬は兄との間で反復される。「兄がおれを親不孝だ、おれの為めにおつかさんが早く死んだんだと云つた。口惜しかつたから、兄の横つ面を張つて大変叱られる」(一、251)。

挑発の言葉が介在しない場合も、「いたづら」はやはり自他に少なからず損害を与える。「命よりも大事な栗」を盗みに来る、質屋の息子勘太郎は「弱虫だが力は強」く、負ける前に「おれの二の腕へ食い付」き、「痛かつたから(…)向こうへ斃してや」と「落ちるとき、おれの袴の片袖がもげて」(一、250)しまう。動機不明の「いたづら」が、

相手に甚大な被害を与えることもある。「茂作の人参畠をあらした」時は「人参がみんな踏みつぶされて仕舞つた」(一、250-251)し、「古川の持つて居る田圃の井戸を埋め」た時は「水が出なくなつ」てしまい、親が「罰金を出して済」まさなくてはならないほどであつた(一、251)。

彼が周囲と穏やかな関係を構築できないのは、松山の「田舎者」相手だけではない。東京在住の時も同様で、「町内では乱暴者の悪太郎と爪弾きを」されるのであつた。しかし、彼は関係を修復するつもりはない。「おれは到底人に好かれる性でないとあきらめて居たから、他人から木の端の様に取扱はれるのは何とも思はない」(一、253 傍線強調は論者)。不機嫌さとともに他人との関わりを拒むのみである。家を出て「神田の小川町へ下宿して居た」(一、256)間の「三年間は四畳半に蟄居して小言は只の一度も聞いた事がない。喧嘩もせずに済んだ。おれの生涯のうちでは比較的呑気な時節であつた」(一、259)、と述べていたが、教師になつてからの語りにおいては別の事実が開示される。宿直部屋で寝る前の彼は言う、「おれが寐るときに頓と尻持をつくのは小供の時からの癖だ。わるい癖だと云つて小川町の下宿に居た時分、二階下に居た法律学校の書生が苦情を持ち込んだ事がある。法律の書生なんでも

のは弱い癖に、やに口が達者なもので、愚な事を長たらしく述べ立てるから、寐る時にどん／＼音がするのはおれの尻がわるいのぢやない。下宿の建築が粗末なんだ。掛け合ふなら下宿へ掛け合へと凹ましてやつた（四、282—283）。このようなことを得意気に思い出したためか、「二階ぢやない」宿直部屋で「成る可く勢よく倒れ」、「あ、愉快だと足をうんと延ばすと」（四、283）、布団の中にいたバツタの総攻撃を受けることになる。

学生たちのいたずらに腹を立てた主人公は、「おれなんぞは、いくら、いたづらをしたつて潔白なものだ。嘘を吐いて罰を逃げる位なら、始めからいたづらなんかやるものか。いたづらと罰はつきもんだ。罰があるからいたづらも心持ちよく出来る」（四、286 傍線強調は論者、と述べるが、彼が冒頭で挙げている幼少期の「いたづら」にそれほど「心持ちよい」印象はない。少なくとも、爽快な笑いの余裕などまったくない。むしろ、彼の寢床にイナゴを入れ、「イナゴは温い所が好きぢやけれ、大方一人で御這入りのぢやあろ」（四、285）、とぬけぬけと言う学生たちの方がユーモアに富んでいる。大勢で一人を相手にするために余裕があるにせよ、この屈託のなさはむしろ被害者の主人公よりも加害者の彼らを大らかに見せるものではないだろう。

うか。

学生たちの「いたづら」と幼少期の主人公の「いたづら」の決定的な違いは、正直に白状するかしんかということ以上に、「いたづら」を仕掛ける相手をからかう気持の有無である。つまり、他者への関わりを前提としているか否かということである。幼少期の畠荒らしはからかいを逸脱しているし、幼少期も成人してから主人公はからかいをからかいとして受けることを不機嫌に拒絶する。「飛び降りる事は出来まい」、「君の指を切つて見ろ」等のからかいに対して、言葉で返すことをせず、それを「真っ直」に「文字通り」実行してしまうのはすでに見たとおりだ。これはすなわち、先に述べたように無責任な言葉に対する怒りであると同時に、笑いによって他者と関わることへの拒否であるとも言えよう。彼が笑われることは何度もあるが、彼自身が笑うことも、笑いを共有することもほとんどない。相手の言葉に対する常識的な理解を欠いているからだ。

祝勝会での喧嘩で怪我をしたうえに、新聞に中傷記事を書かれた主人公が学校に行くと、職員室で他の教師たちに笑われる。その後、彼が「教場へ出ると生徒は拍手を以て迎へ」、「先生万歳と云ふものが二三人あつた」が、彼は「景氣がい、んだか、馬鹿にされているんだか分らない」（十

一、384 傍線強調は論者)。あらかじめ不機嫌な彼は、他者の反応や相手の意図を理解しようとしないうちに、他者と一緒に笑うこともできず、何よりも自分を笑うことができないのだ。彼が笑うのは、松山に着いた最初の夜、「清が越後の笹船を笹ぐるみ、むしやく／＼食つて居る」夢を見て「大きな口を開いてハ、、と笑つたら眼が覚め」(二、263) た時と、松山を発つ前に、山嵐と一緒に赤シャツと野だいこに「天誅を加へ」(十一、398) た後、来るかと思つていた巡査が来なかつたので安心し、「赤シャツも野だも訴へなかつたなあと二人で大きに笑つた」(十一、399) 時の二回だけである。松山のみならず、東京で清と再会して「もう少しで泣く所」(一、261) であつたとしても、愛する清とも決して一緒に笑うことはない。語りの根底にあるのは常に、不機嫌と非常識である。

## 五

これまで見てきた主人公の不機嫌さ、非常識さは、しかし外国語訳の「坊っちゃん」においては薄められているように思われる。

「坊っちゃん」は「親譲りの無鉄砲で小供の時から損ばかりして居る」(一、249 傍線強調は論者) という有名な

書き出しで始まる。同じ部分のフランス語訳、英語訳は以下のとおりである。

親からの遺産としておれは衝動的で向こう見ずな性格を受け継いだが、お蔭で子供の頃からいつも災難にばかり遭つてゐる(仏・一、7 傍線強調は論者)

子どもの頃から、生まれつきの向こう見ずな性格のせいで面倒な目にばかり遭つてゐる。(英・一、5 傍線強調は論者)

「おやぢは些もおれを可愛がつて呉れなかつた。母は兄許り鼻負にして居た(一、251) という状況にあつて、「親譲りの無鉄砲」は親子の繋がりを保証する大切なものだ。仏訳の「親からの遺産 (héritage)」は「親譲り」という語を裏切るものではない。しかし英訳の「生まれつぎ inherent」という表現では親との関係を示すことができない。父親の死後、次男であるために財産分与に与ることのできない語り手(おれ)にとって、「親譲りの無鉄砲」は彼の自己証明であると同時に親からの唯一の財産なのである。「おやぢは」「おれを見る度にこいつはどうせ碌なものにはならない」

(一、251)、「人の顔さへ見れば貴様は駄目だ」と口癖の様に云」い、「おれを年中持て余してゐ」(一、252)た。それでも語り手によれば、「頑固だけれども、(…)依怙最負はせぬ男」(一、254)であり、語り手同様、「大きな眼をして」(一、249)いる。「些も可愛がつて呉れなかつた」にせよ、兄を傷つけた彼を「勘当すると言ひ出した」ことがあつたにせよ、彼は「あまりおやぢを怖いとは思はなかつた」のであり(一、252)、父子の關係は否定されていない。語り手は「親譲りの無鉄砲」という表現で、不本意ながら「おやぢ」にぶら下がっているのである。

この「親譲りの無鉄砲」という表現が使われるのは第一章のみであるが、この短い章において、同じ表現が合計三回繰り返される。二回目は父親の死後、兄から六百円を渡された語り手が、「幸ひ物理学校の前を通り掛つたら生徒募集の広告が出て居たから、何も縁だと思つて規則書をもらつてすぐ入学をして仕舞つた」後、「今考へると是も親譲りの無鉄砲から起つた失策だ」(一、258 傍線強調は論者)、と感想を述べる。この部分のフランス語訳、英語訳は以下のとおりである。

今そのことを思い返すと、この行為は持つて生まれた軽率な (mon irreflexion congenitale) が招いた大失策だったようだ。(仏・一、20 傍線強調は論者)

思い出してみると、これもまた生まれつきの向こう見ず (my inherent recklessness) が起こした大失敗だったようだ。(英・一、18 傍線強調は論者)

仏訳英訳ともに、主人公を父親から切り離してしまっている。自らの意思による「失策」を親子の繋りの証拠とする甘えはここにはない。

原文で三度目に同じ表現が使われるのは、物理学校を「卒業してから八日目」(一、258)のことだ。校長から呼び出された主人公が、「四国辺にある中学校で数学の教師が入る。月給は四十円だが、行つてはどうだと云ふ相談で」、「此相談を受けた時、行きませうと即座に返事をした。是も親譲りの無鉄砲が祟つたのである」(一、259 傍線強調は論者)、と話者は語る。この箇所も外国語訳には問題がある。

これこそまさに、生まれつきの衝動的な性格 (mon

impulsive native) が出てしまったのだ。(仏・一、2  
0 傍線強調は論者)

またしても、あの呪われたせつかちな (that impetuosity  
with which I was cursed) だ。(英・一、19 傍線強  
調は論者)

フランス語も英語も繰り返しを嫌うために表現を変えるこ  
とは珍しくないが、ここにおいては、いずれの訳も、表現  
のみならず原文の意味を変更してしまっている。

原文で「親譲りの無鉄砲」という同じ表現を、幼少期の  
「いたづら」、物理学校への入学、「四国辺にある中学校」へ  
の赴任と3回繰り返し返すということは、入学や就職という人  
生の大切な節目の意思決定と「いたづら」を等しく並べ、  
自らの意思決定を親の影響下に委ねてしまうことである。  
しかもそれを等しく失敗として語っている。だからこそ、  
「成程碌なものにはならない。(…) 只懲役に行かないで生  
きて居る許りである」(一、251)、という不愉快な結果  
に至る。

この不愉快な結末についても、仏語訳と英訳を見ておこ  
う。

たしかに、おれには善いところなんか一つもない。(…)  
それでも言えることは、これまで懲役刑の憂き目を見  
ずに生きてきたということだ。(仏・一、10)

じっさい、おれは碌なものにならなかった。(…) そ  
れでもおれの名誉のためにただ一つ言えることは、こ  
れまでの人生で懲役刑に服することなくずっと生きて  
きたことだ。(英・一、8)

この部分だけを比べると大きな違いは分かりにくいが、先  
に指摘した「親譲りの無鉄砲」との関連で比較するならば、  
これらの翻訳文は懲役刑になつていないということをより  
肯定的に語っているように思われる。原文では、人生を  
「親譲りの無鉄砲」に任せてきた語り手が、清という最愛の  
女性を失った今、これまでを振り返り、「懲役に行かない」  
ということを自らに残された最低限の価値として、不機嫌  
さを込めて総括するのだ。原文の持つている失意と悲しみ  
は、翻訳文が「親譲りの無鉄砲」を消してしまったことに  
よって失われてしまう。

## 六

主人公が重要な意思決定を適切にできないのは、「親譲りの無鉄砲」からだけでなく、彼が責任も財産も持たない次男であるということも無関係ではない。父親が死に、九州に仕事を傳た兄は家売って財産を片付けるが、「何も知らない」清は主人公に向かつて「あなたがもう少し年を取って入らつしやれば、こゝが御相続が出来ますもの」としきりに口説く。これに対し、「もう少し年を取って相続が出来るものなら、今でも相続が出来る筈だ」(一、256)、と考える彼は、はっきりと自分の立場を理解している。彼はこの家の売却について、次のように述べる。

此方は大分金になつた様だが、詳しい事は一向知らぬ。おれは一ヶ月以前から(…)神田の小川町へ下宿して居た。(一、256 傍線強調は論者)

「一向知らぬ」という表現のために、単に、彼が下宿をしていて不在だから「詳しい事」を知らなかったという意味には読めない。財産分与に与れない次男としての不満が込められているように思われる。ところが同じ部分を翻訳文で

讀むと、英訳はこの不満を消してしまっている。

これは明らかに、相当な額になったはずだが、おれは詳細をまったく知らない。というのも (because) 一ヶ月以前から、神田の小川町に下宿していたからだ。(英・一、15 傍線強調は論者)

ここでは彼が知らなかったのは、その場に居なかったからという物理的な理由で解消されてしまう。少なくとも、彼は自分が知らないことに対して怒ってはいない。

この不満の有無が、「九州へ立つ二日前兄が下宿へ来て金を六百円出して(…)どうでも隨意に使ふがいゝ、其代りあとは構はないと云つた」という記述に続く主人公の感想と対応にも差異をもたらす。以下は原文である。

兄にしては感心なやり方だ。何の六百円位貰はんでも困りはせんと思つたが、例に似ぬ淡泊な処置が気に入つたから、札を云つて貰つて置いた。(一、257 傍線強調は論者)

主人公はそのすぐ後、「今の様ぢや人の前に出て教育を受け



たとえ威張れないから詰り損になる許り」なので、「これを学資にして勉強してやらう」と決意し、「六百元を三に割つて一年に二百円宛使へば三年間は勉強できる。三年間一生懸命にやれば何か出来る」(一、258)、と考えるわけだから、この六百元は彼にとつて無くてはならない軍資金である。「貰はんでも困りはせん」ようなものではない。したがって、本当は必要な六百元なのに、これをわざわざ「貰つて置いた」と言うことで、あたかも自分は欲しくないが、相手が満足するならば貰つてやらうという見栄を張っている表現として読むべきであろう。しかもこれは、「相当な額になったはず」のうちの六百元であるから、「例に似ぬ淡泊な処置が気に入つた」という表現も素直に受け取れることはできない。「その状態を認めて許す意を表わす」(小学館『国語大辞典』)という意味である「置く」という用法をわざと使うことで、この部分は次男としての複雑な<sup>(心)</sup>思いを表わすものとなっている。

ところが、「小川町に下宿していた」ために詳細を知らない英訳の主人公は、原文よりも素直に六百元を受け取ってしまう。

おれは前例のない気前のよさに感激し、彼に札を言っ

て金を受け取った (accepted)。(英・一、17)

ここでは、原文と同様、「これ以上は期待しないでくれ」(英・一、17) という冷やかな言葉とともに差し出された六百元を、主人公は文字通りありがたく受け取っているようだ。英訳の主人公は原文よりも「よい御気性」である。

さて、自分の六百元と清への五十円を受け取った主人公は、やはり不機嫌に兄と別れる。

二日立って新橋の停車場で分かれたざり兄には其後一遍も逢はない。(一、258)

我々は二日後新橋の駅を出発したが、その後お互いに (each other) 二度と会っていない。(英・一、17 傍線強調は論者)

原文の主語は一人称単数であるのに、英訳の主語は一人称複数になっているという問題があるが、それ以上に、英訳では「お互いに (each other)」と相互性が強調されている点がこの兄弟の冷たい関係を変質させてしまっている。兄

に対する斬って捨てるような忌々しい思いが英文にはない。  
主人公の愛想のなさは松山でも観察される。蕎麦の好きな主人公は、散歩の途中で「下に東京と注を加へた看板」(三、276)のある蕎麦屋を見つけ、天麩羅蕎麦を注文する。

何かつる／＼、ちゆく／＼食つていた連中が、ひとしくおれの方を見た。部屋が暗いので、一寸気がつかなくなが顔を合せると、みんな学校の生徒である。先方で挨拶をしたから、おれも挨拶をした。(三、276)

ここで問題なのは挨拶の仕方である。主人公は自分から挨拶をする気はまるでない。生徒が「したから」返したただけだ。ところが、英語では、「我々はこんばんは、と互いに(each other) 挨拶を交わし、おれは食事を続けた」(英・三、47 傍線強調は論者)と訳されている。

初日の教壇で、「こんな田舎者に弱身を見せると癖になると思つたから、成るべく大きな声をして、少々巻き舌で講釈してやつた。最初のうちは、生徒も烟に捲かれてほんやりいて居たから、それ見ると益得意になつて、べらんめい調を用ゐてたら、一番前の列の真ん中に居た、一番強さう

な奴が、いきなり起立して先生と云ふ。そら来たと思ひながら」(三、271 傍線強調は論者)質問を受けるような教師が、町の蕎麦屋で学生と偶然出会い、「互いに挨拶を交わす」だろうか。英訳は兄弟や先生と生徒は互いに信頼し合う、といった常識のなかに主人公を押し込んでしまうのだ。

主人公には明らかに、常識が期待するような素直さ、誠実さが欠如している。数学の主任である山嵐は、新任の主人公の直属の上司に当たり、下宿の世話をしたり、授業の様子を心配したりしてくれている。初日の授業を終え、授業終了後もすぐには帰宅できないことについて、主人公は山嵐に愚痴を言う。「君何でも蚊んでも三時過迄学校にゐさせるのは愚だぜと山嵐に訴へたら」、最初は笑っていた山嵐が、「あとから真面になつて、君あまり学校の不平を云ふといかんぜ。云ふなら僕丈に話せ、随分妙な人も居るから」と忠告がましい事を云つた」(三、272—273 傍線強調は論者)。この部分もフランス語訳、英語訳ともに微妙な違いを見せる。

それから彼は再びはじめになつて、学校の批判をしない方がいい、とおれに忠告した(me consella)。(仏・

三、42 傍線強調は論者)

それでもその後、彼はまじめになり、学校のことをあまり批判しない方がいい、とおれに注意した(warned me)。(英・三、41—42 傍線強調は論者)

「忠告した」「注意した」というのは山嵐の行為についての客観的叙述であるが、「忠告がましい事を云つた」というのは客観的叙述ではなく、山嵐の行為に対する話者の評価である。「がましい」という接尾語は「中世以降、『望ましくない。不快である』といった否定的な評価の意味を示す方向へ傾いてゆく」(小学館『国語大辞典』)ものであるから、ここにおいて主人公＝語り手は山嵐の「忠告」に対して「否定的な評価」を下したことになる。新米教師の主人公が、なぜ、上司である山嵐の忠告に真摯に耳を傾けることができないのか。おそらくは忠告というものが、通常、与える者と与えられる者の間の上下関係を前提としているからである。主人公が拒むのは忠告そのものではなく、これが成立する条件、すなわち、社会的な人間関係である。「否定的な評価」が失われている仏・英訳では、先輩の忠告を聞く素直な主人公になってしまう。

外国語訳がいずれも主人公の不機嫌さ、非常識さを薄めてしまっていることの原因としては、おそらくこの小説に対する先入観によるものであろう。痛快なユーモア小説という先入観をもつて外国人翻訳者はこの小説を読んだものと思われる。そのように翻訳されることで、多くの外国人読者が明るい「坊っちゃん」を楽しく読むのであろう。しかしながら、漱石が他の小説作品や手紙に残している不満や怒り、不愉快がこの作品においても無縁ではないと思うとき、この作品の「痛快さ」を無邪気に楽しむことはできない。

七

「坊っちゃん」はむしろ淋しい小説だ。

「忠告がましいことを云つた」山嵐とはその後、懇意になり、赤シャツらに対して二人で戦う計画を立てる場面は、山嵐と主人公がもつとも明るく輝いている場面である。「あんな奴にかゝつては鉄拳制裁でなくつちや利かないと、瘤だらけの腕をまくつて見せ」る山嵐の「力瘤」を「指の先で揉んで見た」り、山嵐が「曲げた腕を伸ばしたり、縮ましたりすると、力瘤がぐるりと皮のなかで廻転する」のを見て、「頗る愉快だ」(九、357)と語る主人公＝話

者は本当の兄に対しては持つことがなかった親密な愛情で、山嵐を慕っている。二人とも、この戦いが松山においての最初で最後の戦いになることを覚悟しているはずであるから、戦いを前にした男同士の絆の確認と言ってもよいだろう。東京と松山で主人公が過ごす二十四年に満たない<sup>(二七)</sup>の人生のうちで、愛情深い関係を結ぶのは、二ヶ月前に亡くなった清と松山の一ヶ月間弱の付き合いだった山嵐の二人だけである。しかし、この山嵐とは新橋で別れたままである。この部分において訳文には微妙な違いがある。

山嵐とはすぐ分れたぎり今日迄逢ふ機会がない。(十一、399 傍線強調は論者)

山嵐とおれはそこで別れたが、以後、一度も彼に会っていない。(仏・十一、204 傍線強調は論者)

堀田とおれは駅(新橋駅)を出発したが、以後彼と会っていない。(英・十一、222 傍線強調は論者)

いずれも出来事のレベルでは大きな違いはない。しかし、フランス語訳も英語訳も「機会」という「事をするのに最

も都合のよい時機」(『大辞林』)という重要な表現を落としている。原文は「機会」という語を使うことで、会いたくても会えない、という気持ちを表現する。この表現を消してしまったフランス語訳と英語訳は主人公が実の兄と別れたときと、山嵐と別れたときの気持ちの明らかな違いを訳し分けていない。

山嵐は、借りたままの三円を「今となつては十倍にして帰してやりたいくても帰せない」(一、254) 清とは「比べ物にならない」(六、306) にせよ、一度は壱錢五厘の氷水を奢ってもらった相手である。奢ってもらったことで、主人公は「百万両より尊い返礼をした気で居る」(六、307)。学校が山嵐一人を解雇しようとしていることを知った主人公は、山嵐に「君とおれ」の親密さを反芻して言う。

「君とおれは、一所に、祝勝会へ出てさ、一所に高知のびか／＼踊りを見てさ、一所に喧嘩をともに這入つたんぢやないか。辞表を出せといふなら公平に両方に出せと云ふがい、」(十一、388 傍線強調は論者)。表現が幼く、子供じみた印象を与えるが、「きまった所へ出ると、急に溜飲が起つて咽喉の所へ、大きな丸が上がつて来て言葉が出ない」(九、358) 主人公が精いっぱい思いの丈を述べた言葉である。主人公の切ない思いを受け止めてくれた山嵐と

会うことができない悲しみを仏・英訳は置き去りにしている。

主人公と山嵐の友情が相互的であるのに対し、うらなりとの関係は坊っちゃんの片思いのようである。うらなりはおそらくは士族の出で、父親の死後、没落し、生活に困った母親が増給を校長に頼みに行った結果、「毎月五円余分にとれるから」と延岡へ行かされることになったのだ。もちろん、本人も「元の儘でえ、から、こゝに居りたい」（八、347）と言ったが聞き届けられず、山嵐が抗議に行き、「赤シャツさんと堀田さんは、それ以来折合がわるいと云ふと評判」（七、329）だ。

彼はマドンナの婚約者であったこと以外に、自らを際立たせるものを持たない。「滅多に笑った事もないが、余計な口をきいた事もない」彼を主人公はしかし、法外に高く評価する。「おれとうらなり君はどう云ふ宿世の縁かしらないが、此人の顔を見て以来どうしても忘れられない」。「おれは君子と云ふ言葉を書物の上で知っているが、是は字引にある許りで、生きているものではないと思つていたが、うらなり君に逢つてから始めて、矢つ張り正体のある文字だと感心した位だ」（六、313）と語る。うらなり君のどこが君子なのか。加害者になることがないというだけなら、

漢学や体育の教師も同様である。このうらなり君のために「一番生徒に人望がある」（二、270）山嵐は職を失い、

彼の天誅に加勢した主人公も学校をやめる羽目になるのだ。

主人公は下宿屋の女主人の話を聞いてから、ますますうらなり君に同情し、「出来るならば月給を倍にして、遠山の御嬢さんと明日から結婚さして、一ヶ月許り東京へでも遊びにやつて遣りたい気がし」、「どうかして、そばへ懸けて貰ひたかつた位に気の毒で堪らない」（七、333—334）と思い、ベンチの隣に掛けさせる。「在れどもなきが如く、人質に取られた人形の様に大人しくしてゐる」だけの存在感の薄い人物をなぜ、主人公は「顔はふくれて居るが、こんな結構な男」（七、334）と呼ぶのか。「下等の車室」に「飛び込ん」だこの魅力の薄い人物のために、「上等を奮発して白切符を握つてゐる」主人公も「あとから、すぐ同じ車室へ乗り込ん」（七、336）でしようが、うらなり君に主人公の気持ちを通じているとはまったく思われない。湯壺で再びうらなり君を見た主人公は「こんな時に一口でも先方の心を慰めてやるのは、江戸っ子の義務だと思」い、「色々湯壺のなかで（…）話しかけて見」る。「所が生憎うらなり君の方では、うまい具合にこちらの調子に乗つてくれない。何を云つても、えとかいえとかざりで、

しかも其えといえが大分面倒らしいので、仕舞にはとう／＼切り上げて、こつちから御免蒙つた」(七、336—337 傍線強調は原文) 始末である。いったい、うらなり君は主人公の心遣いを喜んでいいのか、迷惑がつているのか。

送別会においても状況は同様である。山嵐も含めて出席者たちは「銘々銅聞声を出して何か唄」(九、363) ったり、主賓のうらなり君が「苦しさうに袴も脱がずに控えて居る」のも構わずに、好き勝手に下品な恰好で歌ったり踊ったりしている。「なんぼ自分の送別会だつて、越中禪の裸踊迄羽織袴で我慢して見て居る必要はあるまいと思つた」主人公は、「そばへ行つて、古賀さんも帰りませうと退去を勧めて見た。するとうらなり君は今日はわたしの送別会だから、私が先に帰つて失礼です、どうぞ御遠慮なくと動く景色もない。(…) さあ行きませうと、勧まないのを無理に勧めて、座敷を出」(九、367) る。どこまでも「人質に取られた人形のような」うらなり君である。

うらなり君に対して主人公が抱く印象は「気の毒」(七、333 九、367)、「憐れ」(七、333、336) という同情と、「君子」(六、313) や「聖人」(九、362) といった尊敬の二つであるが、後者についての根拠は主人

公の主観、先入観以外に考えられない。意思疎通のほとんど成立しないこの人物に対する主人公の態度は、「うらなり君が何と云つたつて、おれは学校を休んで送る気で居る」(九、362 傍線強調は論者)、というこの一言に集約されると言つてよい。主人公は一方的にうらなり君に共感を持つが、相手の意向をほとんど気にかけることがない。

これはすなわち、主人公語り手がひたすら自らの言葉が構築する世界の中に生き、その中でのみ他人と関わっているということである。「多田の満仲の後裔」(四、289 十一、383) としての矜持に支えられ、「正直だから、どうしていい、かからないんだ。世の中に正直が勝たないで、外に勝つものがあるか(…)。今夜中に勝てなければ、あした勝つ。あした勝てなければ、あたつて勝つ。あさつて勝てなければ、下宿から弁当を取り寄せて勝つ迄こゝに居る」(四、290)、という主人公の正義感は、山嵐の「高尚な、正直な、武士的な元氣」(六、319) とともに、野だいこの顔にあたつて「くちやりと割れ」(十一、397) る玉子のように、松山の中学で赤シャツの近代的権力と出会ひ、あつてなく潰される。そのため、下宿の庭で見つけた「頗る水気の多い、旨ひ蜜柑」を「今に熟たら、(…) 毎日少し宛食つてやらう」(十、373) という小さな楽し

みも叶わぬまま、主人公は「不浄な地を離れ」(十一、399)る。主人公語り手の世界を裏切らなかつたのは、松山で一緒に戦って、新橋で「すぐ分れたがり今日迄逢ふ機会がない」山嵐と、主人公と「うちを持つ」(十一、399)に至った、今は亡き清の二人だけである。

それでは、何が主人公語り手のこうした世界観を作ったのか。本などほとんど読まない彼は誰の言葉を聞いて育ったのか。彼を育てたのは、「些とも可愛がつて呉れなかつた」おやぢでも「兄許り鼻負にして居た」母でもなく、彼を無条件で愛し、どこまでも肯定する唯一の人物清であつた。「此おれを無暗に珍重し」(一、252)、「あなたは真つ直でよい御気性だ」(一、253)と繰り返した清は、「自分の力でおれを製造して誇っている様に見え」(一、253)たとおり、主人公語り手を「製造して」いたのだ。「来年の夏休みに」帰郷するときの土産として「越後の笹鮎が食べたい」と言い、「西の方」へ行くと言う「箱根のさきですか手前ですか」と「問ふ」(一、260)清の日本地図は、「生まれてから東京以外に踏み出したのは、同級生と一所に鎌倉へ遠足した時許り」(一、259)の主人公と大して変わらない。裕福な甥ではなく主人公と暮らしたがる清について、「親身の甥よりも他人のおれの方が好

きなのだらう」(一、257)、と想像する主人公は、肉親への情が薄いことにおいて清と同一である。「自分の好きなものは必ずえらい人物になつて、嫌いなひとは屹度落ち振れるものと信じて居る」(一、255)清に育てられてこそ、「人間は好き嫌で働らくものだ。論法で働らくものぢやない」(八、353)、「という科白が出てくる。東京を出たことがないのに、「田舎者は人がわるいさうだから、氣をつけて苛い目に遭はない様にしろ」(七、331)と手紙に書く清と、松山で最初の夜を過ごす山城屋で「田舎者はしみつたれだから五円もやれば驚ろいて目を廻すに極つて居る」(二、263)と考える主人公に差異はない。宿直の晩に生徒たちからかわれ、「是でも元は旗本だ。旗本の元は清和源氏で、多田の満仲の後裔だ。こんな土百姓とは生れからして違ふんだ」(四、289)と考える主人公は、「自分とおれの関係を封建時代の主従の様に考へ」、「自分の主人なら甥の爲にも主人に違いないと合点し」(一、259—260)ている清を笑えない。

坊っちゃん<sup>(二)</sup>は明らかに、「中々想像の強い女」(一、255)清の産物だ。本来は東京の下町言葉を指す江戸っ子の「べんめえ」<sup>(二)</sup>言葉を松山で使いつつも、「商人が頭許りさげて、狡い事をやめない」(十、369)と商人を見下す表現



をする主人公は、「瓦解のときに零落し」(一、252)た  
おそらくは旗本の末裔である清から「あなたはどこが御好  
き、麹丁ですか、麻布ですか」(一、255)、と聞かされ  
て育った。麹丁は「江戸時代旗本屋敷が多かった」土地で  
あり、麻布は「高級住宅地」<sup>(二九)</sup>であるから、主人公が言葉の  
上で親しんだ土地は下町ではなく山の手であった。もちろ  
ん、主人公は清の言葉を鵜呑みにしたわけではない。しか  
し、繰り返し聞かされる言葉は、子供心に呪文のような影  
響を与えたはずである。「清はおれを以て将来立身出世して  
立派なものになると思ひ込んで居た。(…)おれは其時から  
別段何になると云ふ了見もなかつた。然し清がなるくと思つて  
居た」(一、254—255 傍線強調は論者)。「清は  
おれがうちでも持つて独立したら、一所になる気で居た。  
どうか置いてくださいと何遍も繰り返して頼んだ。おれも  
何だかうちが持てる様な気がして、うん置いてやると返事  
丈はして置いた」(一、255 傍線強調は論者)。

清はもちろん具体的な根拠があつてこうした言葉を並べ  
ているわけではない。そのことは主人公も幼い頃から知っ  
ていた。彼女の言う「立身出世」について、「ある時杯は  
清にどんなものになるんだらうと聞いて見た事があ」った

が、「清にも別段の考えもなかつた様」で、「只手車に乗つ  
て、立派な玄関のある家をこしらへるに相違ないと云つた」  
(二、255) だけであつた。うらなり君のあだ名も根拠に  
乏しい清の言葉から生まれたものだ。以下は「うらなり」  
の由来である。

昔し小学校へ行く時分、浅井の民さんと云ふ子が同級  
生にあつたが、此浅井のおやぢが矢張り、こんな色つ  
やだつた。浅井は百姓だから、百姓になるとあんな顔  
になるのかと清に聞いて見たら、そうぢやありません、  
あの人はうらなりの唐茄子許り食べるから、蒼くふく  
れるんですと教へて呉れた。それ以来蒼くふくれた人  
を見れば必ずうらなりの唐茄子食つた酬だと思ふ。  
此英語の教師もうらなり許り食つてゐるに違いない。  
尤もうらなりとは何の事か今以て知らない。清に聞いて  
見た事はあるが、清は笑つて答へなかつた。大方清  
も知らないんだらう。(二、267 傍線強調は論者)

清の言葉の根拠の有無が問題ではない。清が主人公は将来  
立派なものに「なるく」と云ふものだから、矢張り何か  
になれるんだらうと思」い、将来「うちでも持つて独立し

たら」「どうか置いてくださいと何遍も繰り返して頼む」ので「おれも何だかうちが持てる様な気がして、うん置いてやると返事」をし、「蒼くるくれた人を見れば必ずうらなりの唐茄子を食った酬だと思ふ」、主人公は清の言葉の力に動かされ、彼女の言葉を生きていると言つてもよい。

清の言葉のおかげで主人公は「真つ直でよい御気性」(一、253)が助長され、そのまま「慾がすくなくつて、心が奇麗」(一、255)な青年に成長した。主人公がときに非常に神経質な性格を垣間見せ、わたしたちを驚かせることあるが、これも清という「全く愛に溺れて居た」「婆さん」(一、254)に育てられたからに違いない。

主人公が時折見せる以外な神経質さ、例えば、「一体疳性だから夜具蒲団は自分のものへ楽に寐ないと寐た様な心地がしない。小供の時から、友達のうちへ泊つた事は殆んどない位だ」(四、280)という態度、山嵐に奢られた氷水の代金を返そうと「湯銭の様に一錢五厘、学校迄握つて来た」ときは、「膏っ手だから、開けて見ると一錢五厘が汗をかいて居る。汗をかいている銭を返しちや、山嵐が何とか云ふだらうと思つたから、机の上へ置いてふうく吹」(六、307 傍線強調は論者)く、という繊細な心遣いは、清によってどこまでも大切に育てられた幼年期の唯

一の幸福な記憶によるものであらう。

どこへ行つても清は主人公の指針となる。釣り船の中で山嵐を悪者にしようとしながらはつきりと名指すことを拒む赤シャツに対して、どこまでも正攻法で応じる主人公は彼から笑われる。ここで主人公は清を想起する。「赤シャツがホ、と笑つたのは、おれの単純なのを笑つたのだ。単純や真率が笑はれる世の中や仕様がな。清はこんな時に決して笑つた事がない。多に感心して聞いたもんだ。清の方が赤シャツより余つ程上等だ」(七、303—304 傍線強調は論者)。

下宿屋で薩摩芋のの煮つけばかり出されて辟易した主人公が思うのは、「清ならこんな時に、おれの好きな鰯のさし身か、蒲鉾のつけ焼を食はせるんだが」(七、332 傍線強調は論者)、とやはり清のことである。

祝勝会で生徒たちの「卑劣な根性」(十、369)はどうやつても「到底直りつこない」と根をあげた主人公は清のもとに帰るしかない。「さうなつては江戸っ子も駄目だ。(…)どうしても早く東京へ帰つて清と一所になるに限る。こんな田舎に居るのは墮落しに来て居る様なものだ」(十、370)。主人公語り手はどこにあつても、子供時代から世界の構成要素であつた清の言葉を反復している。彼はど

こまでも清の製造物であり、清が語り聞かせた言葉の外に出ることができない。彼は「何かにつけてあなたは御可愛想だ、不仕合だと無暗に云ふものだから、それぢや可愛想で不仕合せなんだろうと思」(一、256) い、それを忠実に実現してきた。

清に製造され、清の言葉を生きる坊っちゃん、清の亡き後はやはり、彼の心の主人である清に回収されるしかない。死の前日の清から「御墓のなかで坊っちゃんの来るのを楽しみに待つて居ります」(十一、400)、と遺言された以上、まだ二十五にもならない彼は、清が待つ墓に行くのを楽しみに残された人生を生きなければならない。

この物語は「清の事を話すのを忘れて居た」という言葉で始まる二つの段落で幕を閉じるが、彼がじっさい「忘れて居た」はずはない。「清の事を話す」ために、清に話すために、彼は墓の方を向いてこれまでの物語を語ってきたのだ。だからこそ、「東京に着いて下宿へも行かず、鞆を提げた儘」の清との再会は、「清や帰つたよと飛び込んだら、あら坊っちゃん、よくまあ、早く帰つて来て下さつたと涙をぽた／＼と落した。おれも余り嬉しかつたからもう田舎へは行かない、東京で清とうちを持つんだと云つた」(十一、399) というこの段落の終わりまで、彼のモノローグで

一気に語られなければならない。再会したときの清の声、自分の声を墓に向かつて自身の声で再現することが残された彼の務めだ。ところが、この肝心な場所、フランス語訳と英語訳はまたしても、直接話法を使つてしまう。

「清や、帰つたよ」

「坊っちゃん、よくお帰りになりました…こんなに早く帰つてきて下さつて本当に嬉しい」。涙が彼女の頬をつたつた。おれも余りの嬉しさに、もう田舎へは行かない、東京でうちを持つて、いっしょに暮らそう、と言つた。(仏・十一、203)

(…) 清を呼んで言つた、「清や、帰つたよ」

「まあ、坊っちゃん、こんなに早く帰つてきて下さつて本当に嬉しい」、と清は言い、涙が彼女の頬をつたつた。

おれも余りの嬉しさに「もう田舎へは行かない。東京でうちを持つて、いっしょに暮らそう」と言つた。  
(英・十一、222 傍線強調は論者)

フランス語訳の方は後半部を間接話法で主人公「語り手の

声に語らせているが、英語訳はすべて直接話法を使い、「言った」という表現で発話者の声を語りから切り離す。

さらに、最終段落においても、死の前日の清の遺言をフランス語訳と英語訳は主人公と清を発話者とする直接話法を用いている。原文は句読点を極力少なくして、清の「満足」から死までを文字通り一気に語る。

清は玄関付きの家でなくとも至極満足の様子であつたが気の毒な事に今年の二月肺炎に罹つて死んで仕舞つた。死ぬ前日おれを呼んで坊っちゃん後生だから清がしんだら、坊っちゃん御寺へ埋めてください。御墓のなかで坊っちゃん来るのを楽しみに待つて居りますと云つた。だから清の墓は小日向の養源寺にある。(十一、400)

ところが例によつて外国語訳は坊っちゃんの声を分断することを憚らない。以下は、清が坊っちゃんに遺言を残す部分である。英訳もほぼ同様なので、フランス語訳のみをあげておく。

死ぬ前日、彼女はおれを呼んで言った、

「坊っちゃん、私が死んだら、お願いですから、ご家族のお墓に埋めてください。そうして、坊っちゃん、わたしはお墓の中であなたが来るのを楽しみに待つています」。

だから清は小日向にある養源寺で眠っている。(仏・十一、204)

どこまでも、主人公「語り手の声に包んだまま物語を閉じる原文に対して、フランス語訳も英語訳も直接話法を用いることで、発話者となつた清を主人公「語り手から独立した存在として語り手の声から容赦なく切り離す。

清に捧げられたこの物語の最後で、清の言葉、上品でやさしく懐かしい女言葉を主人公「語り手は持前の「男らしい声」で再現しなければならなかつた。もう聞くことのできない清の声をよそよそしい直接話法で切り離すことなく、最後まででなざることが、清への最大の供養であつたはずだ。清の遺言を語つたあと、「だから清の墓は小日向の養源寺にある」と自らの声と言葉で物語を閉じる必要があつたのだ。

一 岩波文庫『坊っちゃん』二〇〇九年。

二 夏目漱石『漱石全集』第二巻「坊っちゃん」、岩波書店、一

九九四年、304頁。以後、「坊っちゃん」についてはこれを底本にし、章を漢数字で、頁数を算用数字で示すことにする。

三 以後、松山とする。

四 小森陽一『坊っちゃん』の〈語り〉の構造——裏表のある言葉——、『構造としての語り』、新曜社、一九八八年、385—413。

五 Natuné Sôseki, *BOTCHAN*, traduit par Hélène Morita, *LeSerpent à plumes*, 1993.

六 Natsume Sôseki, *BOTCHAN*, translated by Alan Turney, *Kodansha international*, 1985.

七 宮本陽子「十三夜」における言うことと思うこと』『広島女学院大学 人間・社会文化研究』第八号、二〇一〇年、22—44。

八 シャルル・ペロー「長靴をはいた猫」においては、猫が粉屋の息子につけた「カラバ公爵」という名前が、猫の策略によつて実態となる。Louis Marin, *Le récit est un piège*, Éditions de Minuit, 1978. を参照。

九 四 291、292／六、312、313、314、315、320 その他多数。

一〇 英・二、32。

一一 英・二、37／三、38、40、41 その他多数。

一二 英・二、35。

一三 英・五、76、77、78、80 その他多数。

一四 浅野洋「笑われた男——「坊っちゃん」管見——」、『漱石作

品論集成 第二号 坊っちゃん・草枕』桜楓社、一九九〇年、138。

一五 「皿の様な眼」(五、300)、「大きな眼」(六、311)、「おれの眼は恰好はよくないが、大きい事に於いては大抵な人には負けない」(六、313)等。

一六 愛する清から三円を借りるときの記述、「おれは無論入らないと云つたが、是非使へと云ふから、借りて置いた。実は大変嬉しかった」(一、253)の「置く」は、清に甘える嬉しさを隠すための照れ隠しとなっている。

一七 主人公は「二十三歳四ヶ月」(五、302)で赴任し、一ヶ月経たないうちに退職する。

一八 「相手を罵つて言う「べらぼうめ」のなまりか・江戸下町の職人など「べらんめえ」口調を使う人間の類」。平岡敏夫、文庫本『坊っちゃん』の註、157。

一九 『漱石全集 第二巻』、注解、448。